

保育・保育者の国際交流

山下俊郎

日本の幼児保育は、世界の中で優れた保育の一つである。

もちろん、中には望ましくない形の保育を行なっている幼稚園、保育所のある事は否めない、いわゆるピンからキリまである事はたしかな事実である。しかし、ピンすなわち優れた幼稚園、保育所で行なわれている保育は、施設といい、保育の実際といい、世界のトップクラスに属すると言っている。

しかし、キリ、すなわちあまり賞められない保育もあることは、いささか恥しいと思う。けれども全体として言えることは決して世界に対して遅れを取っていないことだと思ふ。

昨年八月にはOMEPPの第十五回世界大会がポーランドのワルシャワで開かれ、四十余人の日本からの参会者と共に、施設を見る機会があったが、その保育の姿には必ずしも心を打たれるものがなかった。少なくともわたくしの考え方とは逆行している形もあった。

今年の七月には二十四、二十五の二日間は東京で、二十八

日は京都で、日本私立幼稚園連合会主催の国際幼児教育会議が、二十一人か国二十二人のゲストを招いて催され、わたくしも招かれて参会した。アメリカのイリノイ大学名誉教授のハント博士の講演ののち、参会各国のゲストによる自国の保育の状況報告とその後パネルディスカッションが行なわれ、最後に幼児に関して世界に訴えるアピールの採択が京都会場で行なわれ、会議が閉じられた。

昨年のOMEPPの第十五回大会は、OMEPP正式加盟国三十三か国、オブザーバー六か国ですでにある程度わたくし達が文書や通信、過去の何回かの会議で、それぞれの国の保育事情を知っている国が多かったが、今年夏の日私幼主催の会議には、東南アジア諸国やアフリカの今までOMEPPの会議に参加していない国々があり、わたくし達に深い感銘を与えた。

パネルディスカッションで話をしたこれらの国の中で、と

くに發展途上国のゲストの話はわたくしの心を強く打つものがあつた。たとえば、タンザニアの参加者は、「わが国は今よりやく歩くようになったばかりなのに、いきなり一、五〇〇米を走れというのは無理な話だ」と訴えた。タンザニア代表は男性であつたが、最後のア・ピールをわたくしがまとめて壇上から降りたとき、手が痛い程の握手を求め、彼の国から持つて来た手づくりの土産をわたくしの手に握らせてくれた。東南アジア、太平洋地域の諸国でもインドネシア、マレーシア、シンガポール、タイの諸国の報告には、いろいろと考えさせられるものがあつた。このほか、今までわたくし達と交渉の多かつたオーストラリア、ブラジル、オーストリア、ベルギー、カナダ、デンマーク、西ドイツ、フランス、メキシコ、スウェーデン、大韓民国、スイス、アメリカ、イギリスの諸国からの参加者の報告にも、学ぶべき所もあり、また賛成し兼ねる所もあつた。

しかし、これらを通じてわたくしが非常に強く感じたことは、OME Pの大会の場合、平常OME P本部から寄せられるいろいろの情報や要請についても同じであるが、この文の標題にかかげた保育・保育者の国際交流の必要性ということ

である。日本という国は遠く東洋に離れた国であり、またわたくし自身もそうであるように言葉のハンディキャップがある。長く鎖国になれた国民性は未だに尾を引いている感じがある。

わたくし達は、このようなハンディキャップを乗り越えて、もともと国際交流を計らなければならない。最近、いろいろな旅行業者の計画する海外旅行団の中に、幼児保育の視察を目的とするものも大分あるようであるが、それらに参加されるのもよからう。そして、諸外国の保育者と交流して、わたくし達の国の保育はけつして外国にくらべて劣っていないという意気込みを持って、話し合い見学されたら、必ずよい成果が得られるであらう。

最後にもう一つ是非触れなければならないことがある。この文が載るのは十二月号という編集部の話であつたが、明けて一九七九年は「国際児童年」である。政府は行事ばかり考へ発表しているが、わが国の子どもの幸せを高めることは言うまでもなく大切である。しかし、国際というのは世界に目を向けることである。世界の子どもが幸せになることが大切なのである。みんな世界に向けて目を向けよう。(九月五日)